

『灸法口訣指南』について

橋本 史代

日本鍼灸研究会

『灸法口訣指南』五巻五冊は、貞享2(1685)年に刊行された、岡本一抱子(1654?~1716)の手になる和文の灸法書である。岡本一抱子は味岡三伯の門人で、近世日本において古医籍の諺解書を多く手掛けた医人として有名であるが、鍼灸の啓蒙の手引き書ともいべき書もいくつか著している。本書はその代表作の一つで、一抱子が初めて刊行した著作であるとされる。

本書は、まず巻之一で灸法の総論を18項目に分けて述べ、巻之二~四で正経十二経と任・督脈の経穴を部位別に分類し、図解入りで詳細に解説する。巻之五では経外奇穴(7種)と病門ごとの灸治法を載せている。主な典拠文献は、『鍼灸資生経』『鍼灸聚英』『類経図翼』である。巻之一では、俗説論第十八を除く17項目が、『資生経』巻二と『聚英』巻三の灸法と禁忌に関わる記述、『図翼』巻四・鍼灸諸則と巻十一・諸証灸法要穴の序文を基に構成されている。巻之二~四で展開される経穴の解説は『資生経』巻一を軸に、『聚英』巻一、『図翼』巻六~八の内容も加味され、まとめられている(ただし、本書の巻二・灸法分寸総論にあるように、『靈枢』骨度篇の骨度法を絶対的基準としているため、取穴法の記述がより詳細なものになっている)。巻之五も前述の3書に依るところが大きい。

本書の特徴は、典拠である中国医書の内容を再編、解説していく過程で、随所に和俗灸法の詳解や問題点を指摘している点にある。それは巻一・俗説論第十八や、巻五・小兒斜差之穴の項目にそれが見受けられる。更に特に強い印象を受けるのが巻二・灸法分寸総論・中指寸法・頭部堅之寸法で主張されている『靈枢』骨度篇の骨度法の強調である。本書の刊行以前に最も流布していた日本の灸法書である曲直瀬玄朔著『日用灸法』(寛永10〔1633〕年刊)には、「尺寸ヲ定ル法」「髮際ヲ定法」「大椎ヲ定ル法」という取穴に関する簡便法が記載されている。この3法はまた、江戸前期後半から中期にかけて何度も刊行された鍼灸のマニュアル本ともいべき著者未詳の『鍼灸抜粹』(延宝8〔1680〕年刊)の中にも記述がみられる。しかし岡本一抱子は、本書において『鍼灸抜粹』を名指ししてその方法を論難し、また『鍼灸抜粹』を自ら改訂増補した『広益鍼灸抜粹』(元禄9〔1696〕年刊)の付録でも「髮際之弁」「大椎之弁」「尺寸之弁」という項目を設け、3法の誤りを強調している。しかし和俗に行われているこうした簡便法を完全に否定している訳ではなく、むしろ簡便で浅薄な方法だけに止まらないよう、あえて強く警告を發したのではないかと推測される。

灸法に関して、明確な典拠と該博な知識に基づいて行われる解説は、単なる再編書や臨床についてのマニュアルでは得られない、より深い知識と理解を提供しようとする著者の意志を感じさせる。この姿勢は、後に刊行される『鍼灸抜粹大成』(元禄12〔1699〕年刊)、『鍼灸阿是要穴』(元禄16〔1703〕年刊)にも貫かれている。

既に述べたように、本書の巻一・俗説論第十八と巻五・小兒斜差之穴では若干の和俗灸法についての言及が見られるが、後年の『鍼灸阿是要穴』でも日本古来の灸法である「本朝灸法」が数種挙げられている。これらは、江戸中期後半から後期にかけて成立した『灸熯塩土伝』(宝暦8〔1758〕年序)や『名家灸選』(文化10〔1813〕年刊)などに代表される和俗灸輯集書の先駆的な業績といえよう。